

1. 実験概要

- 朝霞台駅南口エリアにおいては、人通りが多い一方で歩道が狭く、歩行者や自転車が交錯していることに加え、場所によっては交差点の見通しが悪いなど、交通安全上の課題も顕在している。今回実験を行う箇所は朝霞台駅南口に接続する道路は武蔵野線の高架沿いに位置する、幅6.6m、延長60mの道路「328号線」である。本実験箇所を舞台に交通と滞留の観点から実証実験を行う。

2. 今年度の調査内容

利用状況調査

⇒歩行者・自転車・車両・荷捌き車両の交通量調査/周辺駐輪場の利用状況を調査

スナップ調査

⇒現況の南口において、人々がどこでどのように過ごしているかを写真で記録

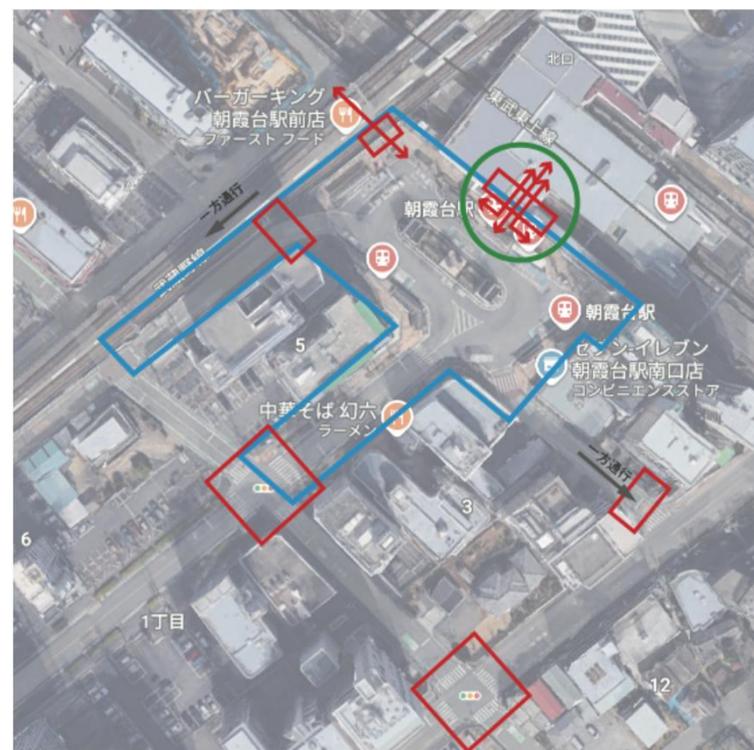
アンケート調査

⇒エリアに不足する機能や交通安全上の課題をアンケートで質問し回答を得た



< 調査範囲と箇所 >

□ 利用状況調査 □ スナップ調査 □ アンケート調査



3. 意見と対応

主な意見	意見に対する検討、対応方針
<p>○歩車共存 中途半端に「歩行者レーン」「自転車レーン」「車道」を分けるよりも、むしろ「歩行者・自転車・車が同じ空間をどう共有できるか」を試すべき。</p>	<p>実際の朝の移動を見ると混ざって「錯綜」「混乱」している現状である。それは「共存」という形ではないが、どのようにしたら「共存」になるのかを探る必要がある。</p>
<p>○荷捌き車両 荷捌きのスペースを明示することがまず一つ。それにより歩行者や自転車の動線など自然発生的ルールが決まる。荷捌きの位置については制度改正を見据えて右側で検討してほしい。</p>	<p>現在位置を検討中(調査後に判断可能)。指定時間については運送会社と調整が必要である。</p>
<p>○自転車レーン 自転車レーンを分けている方がかえって危ないんじゃないか、スピードを出しやすいから。安全性のためにも歩行者と自転車を混ぜた方がよいのでは。</p>	<p>実施期間中に自転車レーン有り・無しの2パターンを検証する。またレーン有りの検証の際には安全性を確保した上で実施する。</p>
<p>○夕方の時間帯 朝のみでなく夕方の高校生を想定した方が良い。この時間帯に自転車が一気に増える。その時に安全に機能するかどうか。</p>	<p>朝の移動の時間・昼間の滞留の時間・夕方下校の時間・夜の退勤時間・夜間の何も無い時間の5種類の空間機能を検討する必要あり。</p>
<p>○賑わいの創出 北側から南口へ賑わいが波及するという発想に対し、それは起きにくいのではないかと。駅前には「乗換動線」という機能空間。賑わいとは相性が悪い。重要なのは、公園側、住宅地側で「社会実験やってるから行ってみよう」と住民が来る関係性をどう作るかが重要になってくる。これは「公共空間で人が集まる仕掛けをつくる」という方向性と完全に一致している。</p>	<p>ご指摘のエリア(未来ビジョンで示す南・西エリア)を対象にした賑わい創出の仕掛けを実施する。</p>
<p>○歩車分離の方法 デザインは「強制しない」ことが大事。ポールやガードレールで区切るのはNG。かわりにプランター、花壇、おしゃれなポール、舗装の模様で「無意識に分かれる」動線誘導をつくる。ロンドン、札幌、会津若松等の事例も紹介されている。</p>	<p>大学の先生へのヒアリングでも物理的な構造物で車両と歩行者・自転車や什器を分けた方が良いという意見があった。その際に「プランター等でもよい」と発言もあったので、無意識に分かれるを意識したうえで「区切り」を設置する</p>
<p>○実験実施方法 社会実験は「1か月&切替方式」がベスト。1か月で2週間×2パターンあるいは3パターン切替→どれが一番安全か、一番使いやすいかを比較できる。最初は警備員多めで慎重に。問題なければより「共存より」の案に移行。</p>	<p>実施期間中に自転車レーン有り・無しの2パターンを検証する。またレーン有りの検証の際には安全性を確保した上で実施する。</p>

4. 次年度の社会実験メニューとその内容、スケジュール

実験メニュー	実験内容
時間帯別に運用を変化させた道路空間の柔軟な活用	一般車の進入禁止と荷捌き停車エリアの明示と荷捌き時間帯指定した上で、自転車と歩行者のエリアを分けた運用
道路空間における賑わい創出	新たな賑わい空間としてキッチンカーや出店スペース等を設置
実験の取組実施に伴う周辺での対策と影響把握	自動車・自転車・歩行者交通量調査及びスナップ調査、アンケート調査で実験の影響を把握

<スケジュール>

- 令和7年8月～令和8年2月 実験企画調整、調査計画調整
- 令和8年2月～3月 事前調査実施、とりまとめ、実験企画調整
- 令和8年5月～6月 南口道路空間利活用実験(道路空間の柔軟な活用実験、道路空間における賑わい創出実験)
- 令和8年6月～令和9年1月 実験結果収集、効果検証、課題整理、今後のあり方検討
- 令和8年6月～令和9年1月 次年度以降の活動につながるキープレイヤー発掘、関係づくり

5. 評価

- 順調に実験が進んでいる。
- 次年度の実施内容が具体化されているため、継続して実験を行うことが妥当と考える。